

關係及び金人の形體を闡明されんとしたもので、鑲即ち鐘鼓を懸垂する架臺の柱であり、其の礎座として猛獸の踞る意匠のあつた例を稽へ、金人の場合は其の跏座たる猛獸象と同じ役目を勤めてゐたものであること、其の形體は跏座し、兩手を擴げて鐘鑲を承けてゐたこと、勇壯なる狀貌を具へ身に鱗文を刻してゐたこと、及び夷狄に類する服裝を著けてゐたこと等を文獻上より推定し、之が形態を髣髴させる實例を考古學的資料に求めて、此の種の意匠が支那人の間に發生し周末以來行はれたものであることを認められて居る。秦の始皇帝の金人に就ては龔に藤田博士は鐘鑲即ち金人であると論ぜられて居り、之に對して原田氏は鐘鑲の跏座として金人が作られたものであるとの解釋を提出された次第である。文獻の解釋等に就てはなほ異論の出得る餘地もあるのではないかと思はれるが、大體に妥當なる説であらう。尙怪奇なる人物或は動物が基座として物を支へる意匠は古代諸民族の間に行はれたやうであるから、支那に於ける其の起原に就ては又別に或る考が成立つかも知れないが、之は今觸れる範圍ではない。

以上諸家の研究の外、直接美術に關せぬとは云へ、唐都長安に於ける牡丹の鑑賞(石田幹之助)、上代支那の「巨鼈負山」説話の由來について(出石誠彦)、大秦の木難珠と印度の如意珠(白鳥庫吉)、鮮民白衣考(鳥山喜一)其の他吾人の興味からぬ諸説が書中に收められてゐる。(青山)

菊判 口繪コロタイプ二 本文一二四頁 挿圖網目版二五圖 昭和八年八月九日  
富山房發行 定價五圓八拾錢

## 歷代箸錄畫目 福開森編

支那畫の研究に於て先人の著録の無視し得ないことは今更云ふまでもない。而して略畫録の體を具ふるものは五代以前は姑く措くとするも、宣和畫譜、中興館閣儲藏以下數十百を以て數ふべく、題跋、雜識、隨筆の類にして畫目の用を兼ね得るものを加へたならば蓋し夥しい數に上るであらう。今一畫蹟に就い

て、これが何の書に著録せられてあつたかを直ちに想起することは、如何に強記の人と雖も尙遺漏を免れ難い所であつて、之を檢索し得るに便宜な書の編輯は夙に學界の待望する所であつた。然しながらその事や、言ひ易くして行ひ難く、一見機械的の勞力の如く思はれるが、實は多大の學識と、精勵とを要するものであり、學に忠なるものにして初めて能くし得る所である。今金陵大學中國文化研究所叢刊として此書が出來た。著者福開森 Ferguson 氏は滯支多年、美術に對する造詣深く、此書を爲すに恰當の人である。而して本書は此種の編著の先驅をなすものとしては先づ遺憾なきに近しと云ふべきである。

引用書目一百餘種、此等の書に記載された畫蹟の題名のみを抽出し、之を人名によつて分類してある。内容を説明する爲めには、一例を擧げるのが最も捷徑であらう。假に女史箴圖に就いて知らんと欲せば、顧愷之の項を求めて、之が宣和畫譜、清河書畫舫、佩文齋書畫譜、式古堂畫攷、石渠寶笈初編、大觀錄、墨緣彙觀、西清劄記、曝書亭畫跋、諸家藏畫簿に出づることを知り、且各書名の下にはその卷丁數が附記されて居るから、之によつて直ちに原典より檢出することが出来る。

此種編著の價值は一に係つてその引用書の多少、撰擇の精粗、及び校訂の嚴密さにある。此點に於ても本書は略信を措くに足りると信ぜられる。固より多少の遺脱を保し難く、引用書に於ても、例へば漫堂書畫跋、頻羅庵書畫跋を逸せる等、著者の見識によるものか否かを詳にしないが、恐らくは後日の補充を期すべきであらう。尙望むらくは墨林今話の如く著録に非ずして、畫蹟に關する事項を含むものをも採りたく、雜書ではあるが天咫偶聞の如きにさへ及んで居たならば殆んど此種のものゝ全集録に近く、多大の便益を與ふるものであらう。幸に著者の加餐自愛して他日廣く之が増補を發表されることを鶴首するものである。(正木)

六冊 中華民國二十三年三月 金陵大學中國文化研究所發行 定價十二元